

論文の内容の要旨

論文題目 京都府美山町における環境観光－資源人類学のパースペクティブ

氏名 堂下 恵

20世紀後半以降、環境保護は世界的に重要なテーマとなっており、観光においては、自然を対象とし環境に配慮した観光形態、すなわち「環境観光」が盛んに実践・研究されるようになってきている。環境観光における観光対象について、世界各地での観光実践を鳥瞰してみると、西洋的な自然観に基づく「原生の」「残された」自然、あるいは発展途上国に多く残る未開発の自然環境が称賛されている。しかし、環境観光が世界中に浸透しつつある現在、様々な自然観に基づく観光対象が称賛されていくのは明らかであり、日本では、人と自然が共生してきた二次的自然が注目されている。このような環境観光の多様化を受け、環境観光における「環境」とは具体的に何を意味しているのか明確にする必要がある。

本論文では、環境観光における観光資源としての環境がどのように創られているのか、さらには、人々が環境という観光資源をどのように活用し、観光実践から何をしようとしているのかを、文化人類学的手法による環境観光の調査研究から解明する。具体的な調査研究の内容としては、観光および環境に関するこれまでの先行研究を文献調査によって再考することと、日本の二次的自然に着目して、京都府美山町で長期フィールドワークを実施して実地調査をおこない、その結果を分析することである。

本論文の概要について、第1章では環境観光の概要を踏まえた上で、人類学からどのようにアプローチできるのか、観光人類学、環境主義の人類学、ならびに資源人類学の先行研究を再考しながら検討する。これら3つのアプローチのうち、上述した問いの答えを導

き出すのに最も有用なのは、資源人類学的視座を援用することだと考えられるので、第2章以降は観光資源としての環境を資源人類学で議論された文化資源であると捉えて進めていく。

第2章では、環境観光における環境の資源化が地域を越えたレベルとローカルなレベルでおこなわれると考えた上で、地域を越えたレベルの分析として、日本における二次的自然を対象とする環境観光について検討する。環境観光の対象となる二次的自然は複数の視点からの資源化されており、第1に、二次的自然を包括する空間としての農村として観光資源化される。ここでの農村は都市の対極にある地域とみなされ、貴重な環境として称賛される。第2に、環境保護の視点から、二次的自然は貴重な自然の一形態である「里山」としてみなされ、観光資源化される。里山はかつて村里近くの雑木林を指していたが、環境保護運動やメディアによって、二次林やそれを取り巻く包括的な環境のセットと認識されるようになった。第3に、人と共生してきた自然は人類の築きあげたヘリテージ・文化財として価値を付与され、観光資源化される。このように、同一の二次的自然は複数の視点から価値を付与され、環境観光の資源として生みだされる。

第3-7章では、農村、里山、文化財、全ての視点から観光地として捉える事のできる京都府美山町での文化人類学的調査の結果について検討する。第3章では美山町の概要と町行政が観光振興に取り組んだ経緯を紹介し、第4章では大学の研究林となっているかつての共有林を対象とした観光実践、第5章では茅葺き家屋群とそれを有する集落における観光実践、第6章では複数の観光施設の取り組みについて述べる。第7章では観光から移住への発展を考慮に入れて美山町における移住関連の取り組みについて記す。

第8章では第1-7章までで記してきた内容の考察をおこない、第9章では結論をまとめる。考察した結果、導き出せる結論は、以下のとおりである。

まず、環境観光における環境は、人々が生業で活用する生態資源ではなく、象徴資源、具体的には文化資源であり、複数の視座から異なる価値を付与されて観光資源として生成される。加えて、観光資源としての自然は、元になった生態資源としての自然が含有する内容と異なっており、この点に注目しているのは地域住民のみである。

第2に、ホスト側は、美山町という観光資源を活用して観光実践することで、美山というコミュニティの構造を新たな形態へと変化させる。同時に、外部との関係がある者あるいはあった者、すなわち都市生活経験者や美山に地縁・血縁のあった者、移住者らは、価値ある美山という資源を活用することで、美山に住んで生計を立てるという選択が可能に

なり、かつ貴重な美山に関わる自分という視点から、自身にとって最も望ましいアイデンティティを取得したり、状況に応じて使い分けたりできる。

第3に、ゲスト側は、文化資源としての観光地・美山町を消費という形で活用することによって、貴重な農村や里山としての美山町での滞在経験を自分のものとして所有化し、かつ他の人々と差別化された自分を得る。同時に、観光客が美山町という観光資源を消費することによって、彼らが総体として創り上げた、山や森、茅葺き家屋や農村風景を包括した美山のイメージが強調され、再生産されていく。